

日本・バチカン市国国交樹立 75 周年記念「作文コンクール」

バチカン派遣全国代表 4 人に選抜 / 12 月末に派遣
(ローマ法王に謁見)

主とともに～私の核廃絶～

盈進高等学校 2 年
ヒューマンライツ部 重政 優

「ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否し、平和に対して責任を取ることです」

1981 年、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が広島原爆死没者慰霊碑前において、核兵器廃絶を訴えた「平和アピール」の一節だ。私は、広島に生まれ育つ者として、広島と長崎の悲劇を記録し、伝えていくと決めている。

私は高校 1 年から、核廃絶の署名活動に参加している。炎天下も雪の舞う日も街頭に立ち続けている。「『世界平和の日』教皇メッセージ」にあるように、暴力はこの壊れた世界に対する解決策ではない。私は、人類生存と世界平和の実現に向け、核兵器という「暴力」をなくすために、私のすべてを主に捧げる。

「署名なんて意味がない」「核抑止こそ平和を保つために必要だ」。署名活動中、こんな言葉をもたらすこともある。それでも私は、被爆者の「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という復讐と敵対を超えた素朴で崇高な平和への願いを胸に刻み、活動を続ける。

「Small is beautiful」。私が大好きな言葉だ。私という小さな存在と、私につながる小さき人々との連帯が、必ず、大きな環となって、世界を変える、と私は信じる。

私の母はフィリピン人だ。幼い頃から「ハーフ」と呼ばれた。肌がすこし濃いことから、「汚い」などと言われ、いじめられた。それが悲しく、母のことを隠すようになった。教会にも、母と一緒に通わなくなった。そうしたある日、教会で神父さんと聖書の勉強をしているとき、次の一節が目飛び込んできた。

「イエスは神の無条件の愛、受け入れてゆるす愛をつねに説きました」

母の顔が浮かび、涙ぐむ自分がいた。母の名はマリア。25 年ほど前、一人で海を越えて日本に来た。言葉も通じず、たくさんの苦労の中で私を産んでくれた。そして、これまでずっと、私を無条件に愛し、育ててくれた。

「家族を愛してください」。「世界平和のためにできることは何か」という質問に対するマザー・テレサの答だ。私は、尊敬する彼女の答えに膝き、祈った。核廃絶を願って平和活動する私が、最も身近な家族との“平和”に気づくことができなかったのである。母を受け入れず、遠ざけた自分を責め、悔いた。

同時に、私の世界が広がった。「半分しかない」という意味で「ハーフ」と言われ続けてきたが、「フィリピンと日本の二つもある」という「ダブル」で生きていくと決心した。主はきっと「ダブルの私にこそできること」を授けてくれると、私は信ずる。

私は将来、私と同じように、肌の色が違ったり、宗教や性別や習慣が違ったりして、悲しい思いをしている世界中の人に寄り添える人になりたい。世界には、政治的紛争や経済格差などで、恐怖に耐えながら暮らしている人がたくさんいる。母から無条件の愛をもらってきた私は、主とともに、どんな人にも愛を持って接する人になりたい。そして、人類の平和に対して責任を果たす人になりたい。